

○質問者 まず、テレビ会議の内容、これは3月12日の22時50…。

○回答者 3月12日の22時ですから、1号機のことですね。

○質問者 これを見てみると、補正して22時59分からで、録音が録られているときも、録られていないときもあるんですけども、残っているところで、主に意思決定に関わるようなところ。関わるようなところというのは、特に、それによって意思決定が左右されたところもあれば、そうでない部分もあって、とにかく、所長がある重要な局面の中で何か判断をされる時になされた会話とか、その辺を中心にしてピックアップをさせてもらっているんですね。それを順に見ていただいて、記憶の喚起を込めてですね。

まず最初が、3月13日の未明ぐらいの出来事で、HPCIが13日の2時42分に3号機が停止をしました。その後、3時50分とかぐらいになっていて、DDFPを入れようにも、当時、原子炉圧力が4.1MPaぐらいになっていて、ちょっと入らないなというような状況のころの話で、ここを抜粋した趣旨は、要するに、HPCIが停止して、DDFPを入れるというようなタイミングのことだとか、あと、DDFPはどれぐらいだったら入るんじゃないかとか、消防車のポンプだったらどうなんだろうというような議論をこのころずっとされている記録が残っているんで、その辺を見ていただいて、そのころの状況を思い出していただきたいと思います。では、お願いします。

(録画部分)

「これから、ちょっと変わったことがあったんで連絡しますけれども、3号機」

「はい、3号機」

「HPCIが2時44分に一旦停止しました」

「2時44分、一旦停止、はい」

「炉圧が低いんで、RCICは運転しないで、そのときは炉圧低かったんで、DDの消火ポンプを起動しまして、これで注水しようと思いました。しかし、この時点でDDの消火ポンプは0.61MPaぐらいしかなくて、入りませんでした。3時44分ちよいぐらいのデータを見ると、炉圧が、HPCIが停止した後で、その前は0.7メガぐらいのものが4.1メガまで、5倍以上上がっているんですよ。7キロから41キロ。これを超えられると、どういうあれなのか、今、確認していますけれども、炉圧が上がっていると。それで、今、もう一度HPCIが回らないかとか、代替の注水手段を確認しているところなんですけれども、ちょっと3号はトランジェントな状態なので」

「はい、わかりました。了解です」

○ 次のところも続けていいですね。

○質問者 いいですよ、そのまま。

(録画部分)

「保安班から、今朝方までのモニタリングポストのデータについて情報を共有しておきます。MPの8番付近にあります（・・・）のデータで、 $4.5\mu\text{Sv/h}$ 、2時50分です。正門、2時50分で $3.14\mu\text{Sv/h}$ です。変化はございません。正門でのダストですが、1時45分～2時05分で確認をしておりますが、ダストで 6.4^{-5} ベクレル/ m^3 。希ガス、ヨウ素関係では検出限界以下です。MP4におきましては、3時08分で $39.6\mu\text{Sv/h}$ ということで、ここについても大きな変化は見られておりません。以上です」

○質問者 次も入れてしまっていていいですよ。

○ はい。3分ぐらいだと思います。

○質問者 これは3時59分ですね。

（録画部分）

「これは何に使おうとしているんだっけ。3号機の電源をそこで何かつけるの。電源のところをつけるの」

「DDFPは3号も生きていて、その突出圧が5キロ、6キロなんです。それに対して、消防のポンプは10キロ以上あるんで、炉圧か下がってきたときに、電源低いよりも容量が高い圧力で、高い容量の給水が（・・・）」

「それぞれのラインに消火ポンプを入れてしまうわけではないだろう。悪いけれども、大至急、■■■■さんと調べてくれないかな」

○質問者 一旦止めますけれども、今、3時50分台の、3時52分ぐらいから4時前ぐらいまでの間、■■■■さんの話のところまで、10分ぐらいの間に、途中ちょっと保安班の情報が入りますけれども、ここで言われているのが、要するに、HPCIが停止した後に、炉圧との関係でDDFP入りませんでしたと。DDFPというのは、最後の方で■■■■さんがおっしゃっているところが、突出圧が5キロ、6キロなんです。みたいな話があって、要するに、DDFPというのは、0.5メガ、0.6メガぐらいの吐出圧しかないということは、炉圧がそのぐらいまでであると、もう入らないという状況になりますね。その辺との関係で、DDFPはもともと生きていたということであれば、その前の段階で、ぐーっと上がるよりも前の段階で、入れようとしていたことというのはないんですか、現場の方で。

○回答者 DDの件は、前も申しましたように、起動しておいて、要するに、圧力バランスが勝てば入るわけです。勝たなければ入らない。単純にシステム構造、それだけなんで、起動さえておけば、チェック弁の圧力バランスだけです。このタイミングは頭の中ですっかり忘れていたんですけども、運転側が、一部の者でしたけれども、DDを希望したらいつでも、圧力バランスをあれしたら入れるように準備をしていたんです。それが、結局、入っていないと。炉圧が下がってもですね。そういう話になったと思うんですね。ですから、0.8になったから、そこで起動させて入れたというよりも、その前から準

備はしておいて、圧力バランスは結局、負けているんで、入りませんでしたという説明を
■がしているところです。

○質問者 DDFPで吐出圧というのは、どの段階なんですか。ポンプの辺りのところ。

○回答者 そうです。ポンプの(・・・)

○質問者 そうすると、例えば、そこからまた炉のところに行くまでに圧が下がる可能性はあるんですか。

○回答者 ですから、チェック弁があるわけですね。こっちの圧が高ければ、こっち側の圧が高い方から入るし、こっちが高いときはこっちに戻さない、止めてしまうという、こういうバルブですから。

○質問者 私の素人の考えで、これはどういう状況なんですか。計測する、DDFPの性能を言うときの吐出圧が5キロ、6キロというのは、炉に入る段階での圧が、そこが今回、6ということですか。

○回答者 そうです。DDのものは別に圧力計がついているわけではないんです。ですから、通常のポンプ性能から言うと、実際、吐出圧はそれぐらいで、チェック弁の取り合いのところ、流れがなければ圧が込もっていますから、同じ圧力なんです。流れが出た途端に最大圧損分が出てきますから、そのバランスが出てくるんですけども、いずれにしても、チェック弁のこのポイントで、どっちの圧が高いかというだけの話ですから。ポンプそのものの吐出圧と言っているのは、ここはどうかわかりません。圧力計もあるわけではないですから。ただし、DDのポンプそのものの吐出圧がせいぜい5キロ、6キロぐらいですから、成り行きなんです。この圧力バランスについては。

○質問者 そうすると、このDDFPというのは、水源からの水量もそうだし、吐出圧の点においてもそうなので、所長としては、この前からおっしゃっているけれども、そんなに信頼を置いていなかったというのは、これで勝負をかけるのはなかなか厳しいだろうと。

○回答者 厳しい。

○質問者 実際、最後の方の流れを見ると、この状況は7キロから41キロに炉圧が上がってきていて、どうも■さんの話だと、消防のポンプが10キロ以上あるんじゃないかというような部分もあって、そうであれば、そちらの方で切り替えてやっていけば、あるいは減圧操作していけば入るのではないかというところで、消防とかを監督している■さんに調べてくれないかというような、このころの話になっているということなんです。

○回答者 そうです。

○質問者 その次が、それから40分ぐらいたった5時44分ころのお話で、このころから、消火栓とか消火ポンプとか、注水の関係の話で、海水を入れるとか、淡水にするとかいう話がこれからずっと続いていくんですけども、これを聞いていただきますので、まず、5時44分からのものをお願いいたします。

(録画部分)

「要は、でっかい消火栓のタンクが全部空で、2～3立米のものしか残っていないんですよ。海水からタンクいっぱい来ているんですけども、どうします」

「もう海水入れてしまうしかないでしょう」

○回答者 これは■■■■ですね。

○質問者 ■■■■さんですか。止めてもらっていいですか。■■■■さんは吉田所長の隣に座っておられたんですね。これは、消火栓とか消火ポンプは間に合うんだけど、水源が、「でっかい消火栓のタンクが空で」という、この「でっかい消火栓のタンク」というのは。

○回答者 これは多分、防火水槽のことを言っているんだと思うんです。

○質問者 ろ過水タンクではなくて、防火水槽。

○回答者 はい。

○質問者 それがもう2～30分しかない。水がないんだったら、もう海水入れるしかないだろうというようなところになったんですね。

○回答者 はい。

○質問者 これは3号機への注水のことをずっと話している場面ですね。

○回答者 はい。

○質問者 では、ちょっと話が飛んで、3月13日の6時14分と手書きで書いてあるところ、05のところですね。

(録画部分)

「今、言っているのは、各到達は、今、予想では5時30分と言っているんだけど、3号機は到達しているんですかという質問なんだけど」

○質問者 この後ですね。この次が大体、6時43分とか、そのころからですね。

(録画部分)

「吉田さん。ドライウェル圧力を今の状況でもう一度見直して、引き続きベントの時間の再評価します」

「緊急です。緊急割り込み。■■■■君、■■■■君。吉田所長、吉田所長、聞こえますか」「吉田さん。吉田所長」

「はい、吉田です」

「首相官邸から電話かかっているんで、電話転送しますんで」

「はい。どこに」

「吉田さんのピッチに」

「内線の■■■■■をお願いします。■■■■■よ。■■■■■」

「サイトさん、通話つながりましたか。サイトさん、今、本店ですけれども、今、保安院の緊対室からなんですけれども、ラプチャーに、いいですか」

「はい、どうぞ」

「ラプチャーに頼ると、ベントするのが遅れて、かなり燃料損傷のベントにどんどんなってしまうので、今からもうラプチャーを破いておいてバルブ開けるということは、今、対応可能ですか」

○回答者 ばかな質問だね、これは本当に。技術わかっていない、このほかが。

○質問者 この破るといのは可能なんですか。

○回答者 できませんよ、こんなの、外から。ほかじゃないか。

(録画部分)

「済みません、今、AO弁を開けるために鋭意努力しています。あと30分ぐらいだと思います」

「早くベントしたって、燃料壊れる量に変わりはないよ」

「技術班からです。現在のドライウェル圧力の推移から、最高使用圧力と限界圧力を、最高仕様圧力は7時50分、限界圧力は13時30分の予定です。非常に上昇速度が早い状況です」

「済みません、もう一度確認させていただきますと、1F-3の最高使用圧の到達が8時半から7時50分に変更ということによろしいですか」

「7時50分に変更でOKです。1F-3の最高使用圧力の到達」

「もう一度確認ですけれども、BCVの最高使用圧が7時50分、限界が13時30分ということによろしいでしょうか」

「結構です」

「ベントの外に行かれるのは、あと30分ぐらいかかるということによろしいですかね」

「聞こえない。何と言っているの」

「30分ぐらいということ結構です」

「了解」

「官邸から、海水を使うという判断をするのは早過ぎるんじゃないかというコメントが来ました。海水使うということは、もう廃炉にするというようなことにつながるだろうと、こういう話で、極力、ろ過水なり真水を使うことを考えてくれと」

「指示に従って、ろ過水だけで入れられるところからということで、休憩を取りまして、それで順次行きます」

○質問者 ここで一回止めておきますね。今、注水とベントがまさに入り乱れているよう

な状況で、相当、状況としては緊急を要しているという状況がよくわかるんですけども、最後のところまで、しばらく本店とのやりとりが、■■■■さんがやられていて、画面を見てみると、一番右側の分割画面の左手の方に所長が映っておられて、その間ずっと電話されていましたね。まず、だれからの電話でしたか。

○回答者 多分、まず最初、■■■■

○質問者 東電の。

○回答者 ええ。官邸にいて、官邸から本店に電話がかかってきて、■■■■に転送するという形になったんです。実際、■■■■と話をした後、私、記憶が本当に欠落していて、■■■■からそう指示があったというよりも、だれかに代わったんですよ。代わった相手が今も記憶にないんです。

○質問者 それは東電の人でしたか。

○回答者 ■■■■から武黒に代わったのかと思うんですけども、この時点で細野さんとのホットラインはできていなかったと思うんです。

○質問者 細野さんはいつぐらいからですか。

○回答者 これも記憶がもう、これは13日ですね。

○質問者 では、遅くともどのぐらいまでには。

○回答者 13日に3号機が爆発しますね。この時点では連絡をしてくれという話が向こうからあった記憶がある。で、連絡したんです。3号機が爆発したときに直接ですね。勿論、テレビ会議でも発話しましたが、直接官邸に電話して、細野さんに電話して、今、爆発しましたという情報を入れたんです。ですから、そこは覚えているんです。

○質問者 それよりも前に細野さんに電話したこととか、あるいはかかってきたと。

○回答者 かかってきたんです。要するに、1号が爆発したときに、情報が全然官邸に流れない。遅かった。東電並びに保安院からですね。2時間ぐらいかかってしまって、プレスする前にNHKの爆発の画面が出てしまって、非常に情報の流れが悪いと。現場の状況を適宜確認するために電話をしてほしいというのと、こっち側にどうやって連絡すればいいんだという話が、これも官邸対応している東電の人間がつながってきて、その電話を代わり代わりした中で、細野さんが出てきて、細野です、これからそういう形で、現場で何かあればこちらの電話にということで、細野さんの携帯の電話番号を教えられて、それから、秘書官の人の電話番号を教えられて、ここに電話してくださいと。それから、こちらから用事があるときはどうすればいいんですかとおっしゃったんですけども、こちらは携帯だとかはダイレクトにつながりません。ですから、うちの本店を経由するなり、官邸の人間に聞いてこちらにつないでもらえるようにしてくださいと言った記憶があるんです。だから、この前にそれがあったかどうか、この後でそういう話になったのか、この前だったのか、ちょっと記憶が定かでない。

○質問者 それは12日の1号機の水素爆発後。

○回答者 後です。それは間違いありません。水素爆発後であることは間違いなくて、3号

機の水素爆発の前であることも間違いないです。そのタイミングで官邸とホットラインをつくりましょうという話があったんですね。

○質問者 ちなみに、今、秘書官と出てきたのは、何ていう方が覚えていますか。

○回答者 そのときの秘書官は、その後もかかってきたのは何と言ったかな。

○質問者 それは細野さんの秘書ですね。

○回答者 細野さんの秘書官。

○質問者 総理秘書官ではなくて。

○回答者 そうではないです。結局、細野さんが全部つなぎをするからということで。途中で秘書官が随分増えたから。結局、秘書官に電話して、とにかくここは私も頭の中で、忘れたいのかどうかわからないんですけども、ほとんど残っていないんですよ、記憶で。ナイトウさんかな。「ナイトウの補佐官、秘書官」と書いてあるから。補佐官のときの秘書官ですから、ナイトウさんかな。

○質問者 では、このときは武黒さんは官邸に、この時期は詰められているんですか。

○回答者 出ていたと思います。

○質問者 武黒さんか、あとは、あるとしたら、可能性、選択肢としては、細野さんという場合もあり得るんですか。

○回答者 あり得ると思うんです。だけれども、細野さんと海水を入れる、入れないの、真水か、あれかという話をしたことがない。記憶にはやはりないんですよ。細野さんとの会話を思い出すとですね。

○質問者 では、ほかの、それ以外の、例えば、この辺だと、話の内容からして、魔炉だ云々という話になると、原子力安全委員会の人とか、そういうような人の可能性はありますか。

○回答者 ないですね。

○質問者 それはないんですね。

○回答者 そのときのいろんなパターンがあったんですけども、細野さんにこちらから電話すると、細野さんが首相のわきにいて、安全委員長がいたりするようなところにもかかるときもありますし、細野さんが一人のところにかかることもあるというような状況だったんで、このときがどういう状況だったか。ここからはかけていませんから、向こうから回ってきたんで、多分、官邸で武黒が携帯使えない、どこにいたか、私はわからないんですけども、まずは■■■■か武黒だと思うんですけども、電話取っていたとは思うんですよ。そこからだれかに回したか、武黒からの指示だったかは本当に記憶がないです。

○質問者 では、■■■■さんから代わった人がいるわけですね。

○回答者 多分、■■■■はつなぎしかできませんので、海水から真水にしるとか、そういうことは彼の口からは多分なくて、言えるとする、うちの派遣者で言うと武黒からの指示になりますし、そうでないとする、可能性としては細野さんがおっしゃったかぐらいしかないんです。そのときには安全委員会の方と話をした記憶だけはないですから。だから、

二者を択一すると、まだそのとき、武黒だったのかなという。

○質問者の方が記憶は強いという形。保安院とか、そういう可能性は。

○回答者 ないです。保安院の人とは電話はしていなかった。

○質問者 直接はした記憶はないんですか。

○回答者 ちょっと待ってくださいね。一回、安井さんが電話に登場していた記憶はちょっとあるんですよ。安井さんが出てきたタイミングがここだったかどうかは記憶が定かでない。私の記憶で、官邸としゃべったのは、ジャッジに係る部分は武黒です。それから、報告だとか、官邸の状況で、これはどうなんだという質問に関しては、細野さんと、細野さんが電話を代わって菅首相が出てきたというのがあります。ちょっと待ってください、菅がお話がありますからということで、菅さんが出て、一回だけ枝野さんが出てきたような記憶があります。それ以外で、それは2号機のもうちょっと後ですけれども、2号機の減圧注入のときにもろに出てきますけれども、斑目先生が来たというのがあります。それで、中に安井さんが一回ぐらい登場したような記憶はあるんですが、それはここかどうか分からない。

○質問者 では、何を話したかも余り記憶がない。

○回答者 記憶がない。

○質問者 枝野さんは。

○回答者 枝野さんの話は、ここではなかったです。何か知らないけれども、何か聞いてきたんですよ。細野さん経由で、枝野さんがちょっと質問があるんと言って。大した話ではなくて、現場の状況で、こういうことでもいいんですかみたいな、多分、プレスをされる前に、ちょっと現場の確認というので電話をかけてこられたような話なんで、要するに、こうしろ、ああしろという指示ではなくて。

○質問者 事実確認。

○回答者 事実確認の電話が1回あったような気がする。

○質問者 菅さんは。

○回答者 菅さんはどっちかという質問です。水素爆発はどういうメカニズムで起こるんだということとか、それは水蒸気爆発と違うのかとかいうような御質問をなさっていたのが1点ですね。

それから、菅さん自身が言っているのは、菅さんのわきに日比野さんという参与がいて、あと、福井大学の副学長がいて、BWRの構造からいって、除熱をする、要するに、原子炉の熱を取るというときに、タービン側に回して熱を取れないのかと、蒸気をです。ごく初歩的な質問を菅さんがして、私が説明をし始めたら、ちょっと待って、その質問は日比野さんがしているからということで、日比野さんに代わって、結構忙しいときだったんだと思うんだけど、るる、BWRの構造というのは、こういう事故時に、蒸気と言っても汚れた蒸気ですから、そういうものをタービンで冷やすということにはなっていない、事故時には格納容器を全部隔離して閉じ込めておくというのが設計の基本仕様だ

から、この段階でタービンの除熱機能だとか、タービンを介して復水器の取り付けなどは使えませんという御説明をしたと。それは菅さん経由で、菅さんのわきの参与に言った。それが2点でしょう。

4回ぐらい菅さんが出てきたんです。もう一点は、これはまた結構機微な話と言ったらおかしいんですけども、警戒区域と避難区域、20 km、30 kmの話について、こう決めたけれども、所長はどう思うみたいな話をしてきたんです。知りませんと。こっちは事故操作であれなんで、どれぐらい飛散するかという話は、こちらで計算しているわけではないので、申し訳ないけれども、そこはわからないということですね。本店なり、そちら側の解析しているところで評価してくれと、現場の判断ではないということは申し上げました。

○質問者 これは本店にかかってきて、本店から回されるという感じなんですか。

○回答者 そうです。大体そういうルートで、XXXXXXXXXXに、固定電話の方に本店経由でかかってくる。

○質問者 菅さんからの電話というのは、質問みたいな感じ。こうしろとかいう意味ではなくて。

○回答者 そうですね。菅さんから直接こうしろという指示をもらったことはないです。どちらかという質問で、今、自分はこういうことを考えているけれどもとか、さっきの水素爆発で、こういう事象はどういうこととか、主として質問ですね。

細野さんとは何回もやりとりしているんですけども、細野さんには、こちらから電話するときには、現場の状況ですね。先ほどの3号機の爆発もそうですけれども、今、こうなっていますとか、ちょっとトランジェントがあったときに、こんな状況ですということを、こちらから現場の状況を、勿論、テレビ会議でも発話するんですけども、発話した後、こんなふうになっていますというお話をすると。向こうからもやはり質問ですね。向こうで議論していて、現場がどうだとかという話になったときに、そこはどうなんですとか、どれぐらい余裕があるんですとか、その辺の質問が多かった。これが結構ヒントが多かったんで、どのタイミングか覚えていないんですけども、いずれにしても、細野さんからも指示はなかったです。

○質問者 そうすると、内容的には。

○回答者 だから、多分、武黒から、指示という意味では、だと思ふ。だから、可能性として、武黒が1点と、そのわきで安井さんかだれかがそれに関しておっしゃった可能性も否定できないんですけども、せいぜい絞るとすると、そんなような感じで、武黒か、そのわきにいた安井さんというぐらいしか考えられないなという感じなんです。

○質問者 13日の6時台に官邸から本店へかかって、それが回されてきて、電話を取って、要約すると、海水を使うという判断が早過ぎるのではないかというコメントが来て、海水というのは、それを使うと廃炉にするということにもつながるだろうし、極力、ろ過水とか、水を使うことを考えてくれというような内容なわけですね。

○回答者 ここは、申し訳ないけれども、この前も話したように、私の記憶は全く欠落し

ていたので、ビデオを見て、ああ、そうだったかなと逆に思い出しているぐらいなんで、本当にだれと電話したかも完全に欠落しているんです。ですから、そこは可能性だけの話しかないです。

○質問者 これを見ると、1つ前のところでは、海水を入れてしまうしかないだろうという、もう水も余り残っていないからというところで、そういう話になっていたのが、官邸から電話があって、極力、真水を使うということを考えてくれということなんで、ろ過水だけで入れられるところからやっていくという、■■■■さん、(・・・) あれは入っていましたがけれども、そういうことで、急遽、現場の人たちは、恐らく■■■■さんからだと思うんですけども、指示があって、そこをまた変えていったらしいですね。防火水槽タンクはどこにあるんだという、瓦れきや何かでマンホールのふたが埋まっていたりするんで、みんな探しているらしいんですよ。それで、ここここは使えるんじゃないかというので通してやったというような話のようなんですね。彼らも、最初つくっていたのが急に変わったんで、よく覚えているみたいですね。1つは、ここで、だれかというのは、恐らくタケグロさんなりは御存じなんでしょうから、その辺は聞けばまたわかると思うんで、一応、こういう話はビデオであるわけですから、6時47分ころにそういうことがあったということになるわけですね。

それで、注水のところなんですけれども、この次がQ8番。これはまだ淡水を入れていくところですね。9時10分のところの話です。

(録画部分)

「もうベントされているものと思われたと。」

「次にこのプロジェクトで重要なのは、水源80tしかないから、この80tがなくなる前に、SLCなり、次のステップを引き入れないといけない。それから、もう一つは、この80tをどんどん増やす。人海戦術でも何でもいいから、水をいろんなところから持ってきて、このタンクに入れるという作業に移ってほしいんだ。今、退避してから、OK? 済みません、3号にサポーターは。今、入れに行くように指示しました。80tに(・・・)ように今、指示しました」

「400キロ」

「400キロ」

「SLCの方はスタンバっているんでしょうか、1Fさん」

「SLCはまだ時間がかかるんで、減圧操作行ったんで、時間かかります」

「それは並行して、いつでもできるようにしてください」

「どちらかという、今の状態の中で、メーキャップの水を確保する方が現実的だと思います」

「了解。水の確保最優先」

「1Fさん、済みません、本店ですけれども、保安院に連絡するに当たって、FPを何時

に注入したか、時間を教えてください」

「FP 注入の時間、9 時何分」

「後で連絡します」

「お願いします」

「海水も考えないといけないんじゃないの。これ、官邸と御相談ですか」

「済みません。プラントの情報の 1 個ですけれども、先ほど申しました（・・・）」

「済みません。今、3 号機は、SLC、冒頭は入れたんですが、海水はなしで、真水を集めてきて、タンクで上から入れつつ、こっちでは考えています」

「吉田所長、水はどこから今、持ってくるのか、ある程度めどは立っているんですか」

「例えば、模擬プールの中に水があるではないですか。ああいうのを人海戦術というかわからないけれども、小さいタンク、（・・・）するなり何なり、すべて使える水を使うということで今、考えています」

「昨日の自衛隊が 3 台来ていたようなものをまた頼みますか。オフサイトセンター」

「それは朝から頼んでいるんですけども、なかなかあれなんです。昨日から水系は全部放出しているんですけども、何でもいから持ってきてほしいんです」

「では、オフサイトセンターでできることは」

「済みません、オフサイトセンターなんですけど、昨日、水を持って途中まで行ったんですけども、そこで爆発を彼らは実際に目撃されていて、（・・・）持って行ったんですけども、かなり外部被曝、汚染があって、自衛隊の方はかなり受けてしまったので、そういう意味で、多分、自衛隊の方がそっちに行くというのは難しい状況になりつつあります」

「本部の総務班の■■■■ですけれども、自衛隊につきましては、こちらでも改めて要請をしておりますので、しばらくお待ちいただきたいと思います。窓口はオフサイトセンターを通してやりますので」

○質問者 その辺ぐらいままでちょっと。これは 9 時 10 分ころの話ですので、ちょうど減圧操作をして、9 時 20 分に水を入れるというころの、間際の話で、結局、いろいろかき集めてみて、現時点での水源というのが 80 t 程度というところで、所長の御判断としては、これがなくなる前に、SLC なり、次のステップということで考えておられると。まず、サイト内にある水は何でもかき集めてくるということが 1 点と、もう一つは、よそから水を補給するというところで、何とかならないかということなんですね。9 時過ぎぐらいのときの水源として、このときは、とりあえず官邸の方から言われていることもあって、まず淡水でかき集められるものは全部かき集めるということを最優先課題と。どうしても全部なくなれば。

○回答者 基本的に、最初に言ったみたいに、もう海水しかないだろうというのは変わっていないんです。ただ、極力真水でと言っているらっしゃるんで、真水で対応できる範囲は真水でやりましょうということが 1 点。それから、これは（・・・）になるんですけど

も、早くホウ酸入れたいというのがあった。ホウ酸入れるのは淡水でタンクに入れた方がやりやすいのはやりやすい。コントロールしやすい。それも頭に入っていたというのはあると思います。だけれども、どこかで淡水がなくなったら、海水はやむを得ないなというのはずっと思いつつ、極力、真水努力、できる範囲はしましよと、こういうことですね。

○質問者 途中で、オフサイトセンターにおられる武藤さんが、もう海水も考えなくてはならないのではないのみたいな、これは官邸と御相談ですかみたいなこととおっしゃっておられるようなんですけども、武藤さんも6時以来の経緯というのは御承知なんですかね。

○回答者 と思いますよ。武藤は海水でいいのではないかと思っていたようなんですけども、これをだれが決定したか、よくわからなくなってしまっているわけですね。官邸からの電話がすべてあれして。武藤はオフサイトセンターにいますから、官邸の意向はわからないので、官邸と御相談ですかみたいなコメントをしていると思うんですけども、意思決定者がわからないという状況ですね。

○質問者 所長はもともと海水を入れようとしていたわけですね。官邸の方の指示をした後、人が現場にいれば、またそこで総理となるでしょうけれども、その人自体は官邸にいるわけだから、話ができないわけですね。

○回答者 できないです。

○質問者 あと、1号機の爆発のころには自衛隊が来られようとしていて、結局、爆発を目撃して、オフサイトセンターに戻ってきた。これはオフサイトセンターに詰めている■さんからさっき話があって、外部被曝を受けてしまって、自衛隊が直接1Fに行くのがなかなか難しいかもしれないと。これは要するに、自衛隊に水を運んできてもらうというオペレーションがあって、それがなかなか思うようにいかないというところで、本部の総務班の■さんという方が、本部を通じて、改めて要請していると、窓口はオフサイトセンターを通して行うんで、ちょっと待ってくれということをおっしゃっておられますけれども、自衛隊から運んでもらう水というのも、1つは当て込んであるわけですね。

○回答者 勿論。

○質問者 実際、3号機が爆発する間際、10時53分でしたか、5tのものが7台ぐらい来られた、あれはまさに真水を持って来られたということなんですね。

○回答者 はい。

○質問者 3号機の前逆洗弁ピットの中に水を順次補給していかうとした矢先の爆発だったということになるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 そうしたら、その次が、今度は10時08分ごろですね。09番ですね。

(録画部分)

「消火班から連絡します。現在の消防車による給水、3号への給水ですけども、7500

／mで、圧力が0.75MPaです」

「■■■さん、■■■さん、ちょっといいですか。3号でばたばたしているの、大変申し訳ないんですけども、2号の準備をしないといけなくて、水の手配と、あと、車というか、ポンプ車の手配としてください」

「それで、海水か、どっち使うか、海水使うのか、淡水使うのかで全然対応が変わってしまうんですよ」

「変わると思うので、海水を使わざるを得ないようなことなんだから（・・・）「水という観点では海水にした方が、今、調べてもらっていますけれども、今のピットが」

「いや、海水は基本的に使わない。だから今、一生懸命、真水を集めているんで。だから、今、消防庁とか、仙台消防署とか、来てくれるという話がいっぱいあるんですけども、情報あるのは千葉支店の1台しか、今、向かっていないんですよ、実態は。消防車が。ということで、もう1台、間もなく」

「だから、それはね、保有している、それこそあそこの（・・・）の水だとか、中でいろいろやって、多分、これだけ行っているから、今日、明日ぐらいにはざっと来ると思うから、基本的には水で行くと。よっぽど水が足りないときは海水、やむを得ないときはあるけれども、基本的には水で行くと、真水で。そういうことでやりたいと思います」

「わかりました」

「ちょっとよろしいですか。2号のパラメータが少しずつ復旧されてきて、見えるような状況になってきたんですよ。それで、炉圧、水位はまだ1個しか見えていなくて、（・・・）ぐらいまであるように見えるんですけども、炉圧がずっと下がり加減で来ているのと、RCICが長い間回り過ぎていることで、3本トランジェットみたいな状況に行く可能性があって」

「だから、早目に次の注水手段を、ちゃんと紙に書いて、どこまで行っているか、いつ復旧もとか、だれが何をやっているか、どこが課題があるかというのをちゃんと書いて、1つずつ課題を解決してみんなで共有してやりましょうと言っていた」

「それで、水の話をしました。真水で行くんだったら、多分、いろいろと手配しないといけないと思うんで、お願いします」

「基本的に、もう小一時間になるんですけども、千葉支店の消防車を2号にあてがい、スタンバイさせようかなと考えています」

○質問者 とりあえず、この辺りで。この辺は10時08分ごろで、東電の公表している時系列表との関係でいくと、3号機は13日の10時30分で海水注入を視野に入れて動くとの発電所長指示があって、それよりもちょっと前のころの話になっていて、もう注水を、真水をずっと3号機は入れ始めていて、ベントなども9時20分のところでやって、恐らくこのときはベントが効いている可能性が、その後のパラを見ると圧力も下がっていつているので、あるのかなという感じの状況があって、この辺で■■■さんが提起しているのは、

2号の準備をもうそろそろしないといけないのではないかとということで、3号は淡水で行ったけれども、これはどうするんですかというような話で、淡水なのか、海水なのかで、海水だったら目の前にあるけれども、淡水だとどうしても、3号もやって、2号もやっていると、すぐになくなってしまいうんで、手配をあらかじめしないと間に合わないのではないかという問題意識が出ていますね。このときに所長がおっしゃっておられるのが「海水は基本的に使わない」という言葉であるとか、あと、基本的には水で行くと。よほど水が足りないときは、やむを得ず海水もあるけれども、基本的には水で行く、真水で、そういうことでやりたいと思いませんということで、まず優先的には真水ということになっているんですが、そういう発言に至った理由なんですけれども、そこは何が一番。

○回答者 やはり官邸です。

○質問者 それがやはり一番ですか。

○回答者 一番です。当初言っていたように、私は海水もやむを得ずというのが腹にずつとありますから、最初から海水だろうと、当初言っていたと思います。その後に官邸から電話があつて、何とかしろという話があつたんで、頑張れるだけ水を手配しながらやりましょうと。ただ、水の手配はうちだけではできないんで、自衛隊も含めてお願いしますよという形で動いているというのがこの時点なんです。ある程度自衛隊が動いてくれば水の補給は可能であるかなというところ、まだ期待があつた時点なんで、海水に切り替えるというか、そこまでは思っていないというところ、非常に微妙なところだと思います。

○質問者 ■■■さんの発言を見ると、■■■さんに関しては、水という観念では海水にした方がなどということ言われて、要するに、消防庁とか、仙台消防署とか、来てくれるという話はいっぱいあるんですけども、結局、今、情報があるのは千葉支店の1台で、現実に動いているのはそれしかないのではないかとというようなところから、これで2号だ、3号だ、両方面倒見られるわけがないということで、海水という発言になったんでしょうけれども、今度来る千葉支店の消防署の車は、2号の方の水源にとりあえずはしてというようなことで、このときはおっしゃっているわけですね。所長の腹としては、それでもう何もないということになれば、海水もやむなしということになっているんですか。

○回答者 はい。

○質問者 例えば、この辺り、1号機のときに海水を止めろという話があつたではないですか。

○回答者 連続注入。

○質問者 19時4分ころですね。ああいう感じで、真水を入れていますよと言いながら海水をぼんぼん入れるという考えというのは。

○回答者 多分、皆さん、そういう視線があると思うんですけども、このときはまだ真水をメーカーキャップすれば何とかなるタイミングだと思っていたんです。要するに、連続注入も、結局、メーカーキャップをするなら何とかなるだろうと、こういうふうなところ。だから、腹では、海水も、本当に全然メーカーキャップの方法がなければ、だめですと、最初、断

るんです。官邸から何言われてもですね。だけれども、まだ幾つか発電所の中に真水が残っていましたから、(・・・)の水とかですね。その前に議論して、どこに水があるんだということで、技訓プールの中に何百tぐらいの水があったので、これを連続でメーキャップできないことはないとかですね。その後で、さっき言ったように、外からの水の補給ですね、自衛隊も含めまして、これはずっと前から頼んでいたわけで、それが間に合えば、その真水で何とかできるだろうという、ある意味、見通しと、2つあったんで、そこは官邸のところも、多分、私は申し上げたと思う。水はこれだけしかないという中でメーキャップしていくしかない。内容は覚えていないんですけども、これから先、真水が供給できるなら真水もあるよという話を多分したんだと思うんです。そのときに、中で調達できる水はさっき言ったように技訓プールの水しかないし、外からは自衛隊が水をメーキャップしてくれるというような話があるので、何とか行けるんじゃないかと、こう思っていたんです。

ですから、前の日の時点では、1号としてはメーキャップもできない状態で、真水を使えないんで、海水でやりますと、これも腹決めて、海水を注入し始めた。それはもう廃炉も何も関係なくて、廃炉だと。水を注入していると。これをやめるといのはおかしいでしょうと。やっと始まったのに、もっとひどい状態になる。

それから、もう一つ言うと、いつまでやめるのかという指示がないわけです。注水停止しろと言っても、何時間停止するか、この時点でわからないのに、注水しない状態でずっと放っておくのは非常に怖い。ですから、当然、うるさいと。頭ながら無視ということで、中断しないで続けた。ここはまだ水が、メーキャップができる可能性があるんで、何とか中断しないでできる範囲は真水を集めてやろうではないかという考え方ですから、そこはそんなに、海水をどんどんやるとい、前の日の状況とは違う。

○質問者 要するに、これをわかりやすく言うと、メーキャップするには消防車が必要、来るわけですね。あのときに使えていた消防車の数よりも増えてきますね。3月13日になれば、柏崎とかからも応援の車が来て、そうすると、メーキャップするときに、例えば、1号機のときというのは、本当に限られたところで、消防車1台でやったり、非常に限られていた戦力でやっていた。例えば、2号機とか3号機のリアクタービルの防火水槽とかから連続注水で持つてこようとしても、そこまでできるかという問題も出てきますね。それが3号機になってくると、ラインナップに必要な資機材なども増えてきて、それを可能な限りつくっていけば、何とかいろんなところから残っているものをかき集めてくれば、ある程度はできるんじゃないかと。ただ、その代わり、自衛消防隊とか、南明興産の人たちの作業というのは、高線量の中で、そういう作業を強いられるという過酷な状況は出ますけれども、一応、そういうライン構成などはやろうと思えばできると。そうしたら、官邸の方からも、真水を使えるんだったら、そっちをまず極力使えということだったんで、基本的にはそれで、できる限りは粘っていこうという、そういうころの考え方だったんですね。

○回答者 そうです。

○質問者 では、その次、これは 10 時半ぐらいですね。

(録画部分)

「1 F さん、聞こえますか。本店、[REDACTED] です。1 F さん、聞こえますか」

「はい、聞こえます」

「吉田君のところにも電話行っているかどうかあれですけども、ちょっと状況認識をしたいと思います。武黒さん、あるいは官邸との話です。まず、1 F さんについては、海水を入れるということも当然視野に入れて動くべしという認識をしていて、もう海水も入っているというようなことも思っていたけれども、とりあえず淡水が入ることは悪い話ではなくて、それで、もう海水を入れるべしという判断で下りているというのがまず 1 点。

それから、武黒さんから至急状況を知りたいというのは、DD 系で入れている水の量と、今ある量というかな、それから、設備系でしたか、ろ過水を入れているんだっけね。それが何 t ぐらいあって」

「DD が、今のところ、40 t × 2 ということで 80 t あります」

「80 t。どのぐらいもちそうですか。おおよそ」

「大体、800ℓ / m、0.8 t / m ですから、80 t ですから、何だ、わからなくなった」

「だれかに整理してもらって、私に、[REDACTED]」

「それと、オーダーだけ言っておきますと、要するに、今の化学消防車の方は、40 t の防火水槽が 2 つバックアップで入っていて、80 t だと。それから、DD の消火ポンプの方は、これはろ過水が水源なんで、一応、800 t、今あると言っています」

「ろ過水が 800 t」

「DD のポンプの方は、消防車よりも突出圧が低いですから、まずは化学消防車等が働いているという状況です。それで、流量は 800ℓ / m ですから、今の 800 t の方から言うと、800 ÷ 0.8 ですから、100 ミニッツ近くぐらいの感じなのかな、大体。それで、今、水源を探しに行っていると、こういう状況です」

「それは技訓のところの水なども入れれば、まだ 800 t ぐらいはありそうだと、そんなところでしょかね」

「はい」

「今、海水の方についての注入準備というのは」

「ステップで、続けています」

「ステップで、吊るのを、横断的にはどのくらいで」

「ものの 2 時間ぐらいで、化学消防車が吊っているところの、防火水槽から吊っているホースをそのまま (・・・) つけてやればできるということで、10 分もあればできる」

「では、いつでもできる状況。淡水も今、入れているのはやってください。では、そういうことで、武黒さんには返しますが、いずれにしても」

「吉田さん、済みません、今、計算したけれども、2時間ではなくて、20時間ですよ。今の水源が枯れるのは」

「違う違う、それはろ過水込み込みで言っているでしょう」

「そうです」

「私が言ったのは化学消防車の方だけで言っている」

「わかりました」

「化学消防車だから、そっちを専念してやっているんですよ」

「わかりました」

「化学消防車、もう一回確認します。40t×2というのが、今、入れる80t。それから、持ってくれば、40t、貯槽が2あると」

「そういうことです。どんどんここに入れる」

「それはバックアップ。それから、ろ過水が800tあるので、ろ過水側は加圧（・・・）は低いけれども、頑張れば20時間ぐらいはもつかもかもしれない」

「そういうことです」

「ただし、海水の方が、手早くやれば、10分でも15分でも、ホースを海につなげれば、化学消防車の方から入れられますよと」

「そういうことです」

「そういう認識です。では、伝えます。割り込んで済みません。以上です」

○質問者 ここで止まって。今、小森さんから、テレビ会議を通じていろいろと質問みたいな形で入ってきているんですけども、まず、最初に出だしのところで、状況認識をしたいと思うということで、武黒さん、官邸との話ですとあって、「IFさんについては海水を入れるということも当然視野に入れて動くべしという認識をされていて、もう海水も入っているというようなことも思っていたけれども」という、この「思っていた」というのは、そのときの話をしているところでは、小森さんがそういうふうに思っていたということ。趣旨としては。

○回答者 わからないですね、これ。

○質問者 仮にこれ、武黒さんが思っていたんだしたら、もともと指示したのはあなたでしょう、そっち側でしょうという話ですね。特に、その後に官邸との間で電話をとっているはなかったですか。

○回答者 なかったですね。

○質問者 いずれは官邸も視野に入れて動かざるを得ないですよということを、その後の、例えば、9時半とか10時ぐらいに所長の方から御連絡を武黒さんの方に入れるなりというような記憶も特にないですか。

○回答者 ないですね。この辺、全く欠落しているんですね。

○質問者 ここで一応、言っているところを見ると、小森さんが官邸の武黒さんにいろいろ

る情報などを連絡入れていたんですか。

○回答者 だから、これ、2段やっているんですね。本店の本部と官邸の連絡ラインが勿論あって、これは本来のラインなわけですね。連絡をすれば。そこに何かわけわからず、現場との連絡ラインができてしまっているから、私に指示が来るんですけども、本来は本店本部なりを通して、保安院を通してくるべき話が、こう来てしまっているから、こう来たり、こう来たりするわけです。だから、どういう状況で、時間が変わりますから、多分、官邸の中でもいろいろ議論をやっているんだと思うんですけども、こっちから見ると全然わからないんです。

○質問者 官邸から下りてくるときは、本店ルートと直ルートがあって、こういう場合はこことかいうことでもないんですか。

○回答者 ないんです。さっきの海水注入から淡水入れろという話も、本来、私に電話してくるというよりは、本店にどうなんだという話をして、こちらからこんな状況ですという話にすればいいんですけども、こっちに来てしまっていますから、結構重く受け止めて、今、全く真水がゼロというわけではないから、できる範囲でやりましょうと、こういう形で言っているんです。それを逆に本店に伝えて、官邸から今、真水優先という話があったんで、それで動くよということを本店に伝えているという状況なんですね。

○質問者 この3号の注水関係については、もうすべて現場と官邸で直でやっているというわけでもなくて、最初の入口のところはそうなっていたけれども、その後は本店が報告をしてみたい話になっているんですね。自分たちは状況がわからないから、いろいろ聞いてやる。ただ、本来は、本店を通じてやるというのが正規の予定していたやり方であってですね。

○回答者 そうです。あり得ないですよ。官邸と現場がつながるということ自体が本来あり得ないですよ。

○質問者 官邸も、緊急参集チームからというんだったらまだわかるんですけども、現場対応が必要だということですね。

では、その次、10時43分。

(録画部分)

「ちょっと確認します」

「はい」

「ちょっと、いいですか、1Fさん。今、保安院から指示が来まして、保安院としては、PCベントの1時間前から周辺線量が上がっているの、ベント前からECVから漏れていると思っている。ということは、1F-1のようなこと、爆発などが起こる可能性があると思っているので、例えば、ブローアウトパネルを開けるなどのような対策を考えると、こういう指示が来ています」

「はい」

「それ、検討願います。うちでもちょっと考えるけれども」

「逆に言うと、そこはさっきも言ったように、みんなで考えましょうという話ね」

「本店の■■■■君が一応、評価してくれて、■■■■君にお話しするようにさっき言いました。それは解析上の話なので、ハード的な対応については、もっと一緒に考えないとだめだと思っています」

「はい」

「どうしたの、お話はできたの。吉田君ね、■■■■君がお話しする相手と、ちょっと紹介してもらって、それから、電話が繋がらないんだ、■■■■さんには。どなたに電話したらよろしいですかね」

「逆に■■■■君に決めてもらいますので、■■■■君から■■■■君に連絡します」

「OK」

○質問者 これです。この辺りは、保安院からの指示として、ブローアウトパネルを開けるなどの対策を考えるとということも、3号機については線量などが上がっているんで、また同様の事象が発生するんじゃないかということ懸念していると。恐らく、そういう懸念は現場の方でもずっとお持ちでしたね。ブローアウトパネルを開けるなどの対策を考えるとという指示があつて、それを検討しましょうみたいなことがあつて、これを見ると、本店と現場の方で、直接■■■■さんから、どなたか人を決めて、■■■■さんと窓口になっていろいろお話をしていきましょうみたいな形になっているみたいなんですけれども、この時点でだれか具体的な、ブローアウトパネルをどうしようとかいう話はされていたんですかね。

○回答者 していました。結局、この前も両先生いらっしゃったときにその辺の話をしましたけれども、1号が爆発したときから水素爆発の可能性は否定できないんで、水素たまっていると、逃がさないといけない。ブローアウトパネルを開けないといけない。だけれども、ブローアウトパネルは中越沖地震の絡みでちょっと硬くしているんです。要するに、余り開かないようにしている。地震でがたっと落ちてしまって、開いてしまったものですから、逆にブローアウトパネルを開きづらい方向に改造していたんです。それが仇になって、要するに、人力でなかなか開かないような状態なんです。これは建築の話になるんで、物理的に本店の建設部と一緒に検討してくれという話をしていました。だけれども、それはなかなか実効的な方法はないんで、最後は外からはしご車を持ってきて切るだとか、それにしたって準備にえらい時間がかかるなというように話をしている中で、こういう状況になっていくんで、高橋からさっき電話があつたようなことを言われても、どうしようもないわけですよ。だったら、「保安院来てやれ、ばかやろう」と言いたくなるわけですよ、はっきり言えばですね。こんな腐った指示ばかりしやがってと、いまだにこのときのことばかむかむか来ますけれどもね。こんなのばかりですよ。ただ単に口で何々しろみたいな。ばか言えと。

○質問者 ラブチャージャーディスク破けとか。

○回答者 破けとか。見るだけでも、保安院と出てくると、むかむかすることしか言っていないわけですが、はっきり言ってですね。

○質問者 保安院からの指示として、本店の方から話があるんですけども、保安院からの指示に関して言うと、本店を通じてというラインだけだったんですか。

○回答者 そうですね。

○質問者 直というのではなくて。

○回答者 ないですね。

○質問者 保安院の出先というか、保安院の事務所が。

○回答者 このころはもういません。1人もいないです。

○質問者 このぐらいの間は、そういうのはないですか。

○回答者 ないです。彼らは、この状況を報告したかもしれませんが、こちらに対する指示だとか、そういうのは全くないです。

○質問者 今のブローアウトパネルの話なんですけれども、中越沖地震の後に、容易にパネルが外れないように、地震対策みたいなもので、なかなか開かないようにしたという話ですね。その前などは、手動で開くような。

○回答者 そんなに軽いものではないんですが、強化後よりは、もうちょっと何とか、器具を使って開けられるような状況だったんですよ。どれくらい硬くなっているか、実際、確かめていないんですけども、改造した側の建築から言うと、なかなか開きませんという話を聞いたんで、何でそうなったんだと言ったら、中越沖地震でしっかりとつくってしまったみたいな話をしていました。それを開けられるような方策を本店と一緒に検討してくれという話はしておったんです。

○質問者 例えば、手動でぐーっとやったら緩んでぽんと開くとか、そういう感じではないんですね。

○回答者 ないんですよ。

○質問者 では、開けるとすると、周りを緩めたり、やらなければならないんですね。

○回答者 はい。2つあって、保安院が言っている話は、1つは、ブローアウトパネルを開けるという議論と、■■■■と■■■■にいろいろ言っていますけれども、■■■■がやっているのは開けるという議論ではなくて、水素リークがどれだけの量になるかと。恐らく可燃限界とのバランスで、どうなるかということ、本店の■■■■はそこを確認しているんです。その内容を現場でだれかがフォローしろということで■■■■に、■■■■がどんな検討をしているのか聞いておけという話をしている。ブローアウトパネルを開ける話とはちょっと違う。

○質問者 違うんですね。水素とかのリークはどのくらいかとか。

○回答者 発生量がどれぐらいで、リークがどれぐらい。

○質問者 どれぐらい建屋の方へたまるかとかですね。その辺は技術班ですか、やるとしたら。

○回答者 技術班です。

○質問者 それが本店と連絡を取りながら、情報を得ながらと。

○回答者 ここは多分、かなり特殊な話なんで、本店の■■■がやっているんですけども、うちのサイトの技術班はフォローし切れなかったんで、特別に■■■にフォローしろとユニット所長に指示しているというのがこの時期です。

○質問者 その後、例えば、本店の方から、リークがどういうふうになっているか、いつごろぐらいに危ないですよみたいなのが、打ち返しみたいな、何かこう。

○回答者 これは記憶にないです。

○質問者 その前に爆発してしまったから。

○回答者 まだ1日ありますね。これは13日だから、まだ1日あるんで、この間にいろいろやりとりをやっているんで、そこはまだ余裕がある。

○質問者 余裕があるんですね。

○回答者 ですから、開ける話も、硬いよねという話で、検討せいという指示をした後で、フォローアップはまだできていない状況です。この夜辺りに、ああだこうだ、あれやる、これやるという議論をしたところですよ。

○質問者 それからは、しばらく、■■■さんと■■■さんとか、指示を受けた人間が連絡を本店とやりながらしているということなんですね。

○回答者 はい。

○質問者 次は、20ですかね。

(録画部分)

「(・・・) ルートでそうしています」

「昼間大変心配した1F-2への海水の供給なんですけど、これはどのぐらいに始められるような予定になっていますか。見込み」

「30分か40分で注入するようにします」

「いえ、ちょっと待って。2号機については早目にやりたいんですけども、今のところ、データは安定しているということが1点、それから、3号機、1号機への供給を元に戻すということを一義的にやりますので、そこはしっかりやると。条件をしっかりやった上で判断したいと思って、また時間については改めて御説明します」

「ということは、昨日の段階で2号のデータを見て心配したんですけども、とりあえず今、出ているデータを信じられる状況にあるというふうに判断されると」

「午前中は炉水計しかなかったんですけども、今、炉圧、ドライウェル圧力等々、もうちょっと細かいデータ、そのトレンドを見ている限り、2つの水位計で一応、同じような値を、午前中は1つだったんですけども、そういうところを考えると、若干余裕があると思っっているんです」

「はい、わかりました」

「その辺を総合的に、発電所として判断させていただきたいと思います」

「3号、4号を優先的に続けるということですね」

「はい」

「了解」

「その件で、本店から（・・・）ですけれども、2号の水がないということは認識しつつも、海水からいきなりやるように聞こえてきていて」

「海水からやりますよ。そこは考え方が混乱しているみたいなんだけれども、要するに、もともと1号機はお水がどこにもないんで海水でやりました。3号機はかなり真水があったんで、真水から始めましたが、結局、水の量が足りなくて海水に切り替えたというのが3号機。2号機も本当は真水でやりたくて手配をしたんですが、今日の昼の段階で、場合によっては急遽始める必要があるということを考えて、海水での供給で考えた。そのときに、3号機大丈夫かとか、3号機が危なくなってきたんで、2号機よりも3号機にウエイトを置いて見てきているというのが今の状況で、その間に、2号機用の真水の用意はしていませんでしたから、その後は海水でやるということで進めている、こういうことです」

「わかりました。こちら側の勝手な考えだと、いきなり海水というのは、そのまま材料も腐ってしまったりしてもったいないので、なるべく粘って真水を待つという選択肢はあるというふうに理解していいでしょうか」

「理解していけなくて、もうあそこのラインナップをして、供給源を海の供給源にしてしまいましたから、今から真水というのはないです。時間たっています、また」

「昼間そういう方向で決めたんだけれども、■■■■君が今、改めて質問している趣旨を説明してもらった方がいいと思うんだけれども」

「■■■■君が言いたいのは、真水でやっておいた方が、要するに、塩にやられないから後で使えるということでしょう」

「そういうことです」

「私もずっとそれを考えたんだけれども、今みたいに供給量が圧倒的に大量に必要なときに、やはり真水にこだわっていると大変なんです。だから、この状況で行けば、海水に行かざるを得ないと考えているんです。こういうことです」

「現場の（・・・）理解をしました」

「それでは、供給の話はよくて、次へ行っているのかな」

○質問者 ここまで、とりあえず。今のところは、3月13日の20時20分とか、そのぐらい以降、夜の話なんですね。このころは、3号機についてやるのと、あと、2号機に関して、時系列表の20ページに、12時05分に海水を使用する準備を進めるよう発電所長指示とあるんですね。これは3月13日の12時05分です。

○回答者 20ページ。

○質問者 これですね。13日。

○質問者 では、この次。

(休憩)

○池田さんからは直。

○回答者 そこもまた記憶ないんですけれども、ベントする、しないで、現場でばたばたしているときに、菅総理が来るという話があって、しようがないなと思って、準備してくれみたいな話はしていたんですね。そのときに、ベントとの絡みで、そんな話があったのは、どうも記憶から欠落しています。どっちにしても、現場で努力しても、なかなかできていないので、菅首相が来るから、それで遅らせてくれと言ったって、現場がもともと全然バルブが開かないという状態ですから、チャレンジしている状態ですから、まだしばらく難しいと思っていたんで、余り記憶に残っていないんです。

○質問者 例えば、武藤さんから、池田副大臣がこんなことを言っているんだけど、ベントの時間をいつごろにするんだとか、そういう。

○回答者 あったかもしれません。

○質問者 だけれども、記憶にはない。

○回答者 ほとんど残っていない。

○質問者 そうすると、所長がおっしゃるように、自分の時期についての判断にさしたる影響がないから記憶から欠落しているんだと。

○回答者 はい。とてもではないけれども、菅さんが来るという時間にできるとは思っていなかった。

○質問者 経産大臣が、海江田大臣が、実施命令を6時台に出しているんで、向こうからすると、もうすぐにでもするのではないかと。現場の状況を知らないですからね。そうすると、ちょうど菅さんが来られるのかぶってくる可能性があるんで、そうすると、副大臣としては、その辺の調整をしなければいけないのではないかというので、ベントの時期を若干遅らせるなり何なりという発言になるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 ただ、そのころ、とてもそういう状況にないので、特に影響はないと。

○回答者 記憶にも残っていない。

○質問者 わかりました。

そうしたら、■■■■さんが終わって、次が26ですね。これは、日が変わって3月14日の未明ごろですね。1時台ぐらいですね。このころというと、例えば、2時20分ぐらいに正門付近で線量が上がっていて、15条通報されている時期のちょっと前ぐらいですね。では、お願いします。

(録画部分)

「1Fさん、聞こえますか」

「はい、聞こえます」

「至急の話なんですけれども、今までからずっと言われていることなんです、保安院からまた督促が来て、1F-2の消火系への切り替え時期のことです。それで、保安院の立場は、確かに今、RCICは動いているものの、3号のようにHPCIもずっと動いていて、急に止まってしまって、その後、結局、相当燃料損傷を起こす羽目になってしまったということから考えると、今、RCICはとりあえず置いて、しっかり水位が確保されているうちに、消防ポンプへの切り替えをやらない理由が全くわからないという、そういうことです。要は、早く意思決定をしてやるべきではないかと、こう言われています。それについて、ここで早く決めたいと思っています。これについて、サイトの見解はどうでしょうか。今、本店とは、SR弁の健全性と、それから、FPの方のラインナップ、それから、例えば、(・・・)けれども、確実に動くということを確認できるのであれば、保安院が言っている方がメリットが多いと思っているので、その前提条件を含めて、サイトの見解をお聞きして、ここで意思決定、(・・・)思っています。趣旨は今、言ったような話です」

「昨夜にも説明したとおりで、2号への消火系の切り替えについては準備が整っています。ただし、今、海水のピットが空になってしまっていて、そういうことで、1と3への消火系の注入も一旦停止して、現場の対応をやっていきます。現場の対応というのは、海水のピットをまた満たす、そろそろ今、やっているところで、海水系の注入が1も3も止まっている状態です。ただし、海水ピットがまた満たされれば、1も3も同じように継続、復活して、かつ2号も準備が整うということになります。ただし、2号については、これも昨夜言ったように、PCVのベントラインへのコンプレッサーの追加、要するに、強烈的なエンジン付きのコンプレッサーを事前に追加しておくというのがまだできていない」

「済みません、これは、今、2Fの方から到着しまして、これを受け入れて、これから現場へ持ち込んで、つなぎ込みたいと思っています」

「そうすると、消火系への切り替えに関連して、今、主要なパラメータのうちの原子炉圧力が見えていないんですよ。これも今、見えるように、バッテリーをつなぎ込んでいますので、このパラメータが見えるようになれば、その条件が整うので、海水系への投入ができるようになると、そういう状態になっています」

「基本的には、保安院の言うように、その方向を目指しますけれども、その条件がまだ整っていないので、その条件が整う努力を一生懸命続けていて、それが整い次第やりますと、そういうことでいいね」

「そういうことです」

「では、そういうふうに回答するということでよろしいですか。小森さん、いいですかね」

「では、コンプレッサー」

○質問者 では、ここまでで、とりあえず。ここは、まず保安院の方からの話があって、2号機のRCICが動いている間に、早いうちに消防ポンプを使って海から水を入れた方がいいんじゃないかということで、本店も、条件整うんだったら、それでいいんじゃないか

ということで、そのとき、サイト側の見解はどうですかということで、吉田所長と書いていますけれども、これは■■■■さんで、もう一人言っていたのはだれだったんですか。

○回答者 あれは■■■■です。1Fで説明したのは■■■■です。

○質問者 では、その辺りでおっしゃっておられるところで、特に■■■■さんがおっしゃっていることですが、当時、3月14日の1時10分～3時20分までの間、これは3号機の方に書いてあると思うんですが、時系列表で言うと31ページ、3号機前の逆洗弁ピット内の水が少なくなって、水が取れない、そこに補給が必要だみたいなことになって、その後、3時20分に消防車で海水注入を再開と書いて、この間、水が入ってなくて、ちょうどそのときの話になっているんですね。

3時20分、これは東電でイラストでずっと、消防車による注水の概略図案と、これは関係者からいろいろ聞いていったところを最大公約数的にまとめたもので、一部間違いが判明しているんですが、この辺りは正しいので、11ページ辺りを見ると、逆洗弁ピット枯渇と書いてあって、1時10分から。このときの状況というのは、1号機にも2号機にも、それから、3号機にも、それぞれ消防車を1台ないしは複数台使って、それぞれタービン建屋の送水口から、この逆洗弁ピット内にたまっている海水を入れるということの準備をしたり、あるいは実際に1号と3号は入れて、2号はその退避という状況で、この2号からも入れた方がいいんじゃないかという話が1時10分以降にあって、ただ、1号と3号というところ自体も、ここは水取れなくなって、止まっている状況です。ここに水を入れましょうというところで、実際に、その後、3時20分から、まず3号機について注水を再開したんですが、これは水を入れるというよりも、対症療法的というのか、水が枯渇と書いてありますけれども、完全になくなったわけではないですね。

○回答者 なくなったわけではないですね。

○質問者 水がたまっている部分があって、位置を動かしたら取ることが可能になったんで、とりあえず3号機にはこれで水を入れましたということで、実際には、その後、作業内容としては、未明から明け方にかけて、どんどん消防車が届いてきて、消防車をつないで、物揚場から逆洗弁ピットに水を入れるということをやった上でということになっていて、この3月14日の未明ころなんですけれども、このころというのは、優先順位としては、3号機が一番まずいという状態になっているんですかね。状況から考えると、2号機は一応、RCICが起動中という状況で、1号機は海水を入れていたんですが、1号機もこの時点では逆洗弁ピットから水を取れなくなると、水は入らない状況なんですけれども、そうすると、1号機も水がないという状態ですが、1号と3号で、3号の方がというのはどういう。

○回答者 1号機の方は、その前から注水していますから、リーク、どれぐらいしているかという話がありますけれども、水がたまっているとすると、注入量は1号機が圧倒的に、3号機に比べて、それまでの注入時間が考えて長いわけですから、ある程度水がたまっているだろうと。だから、その水による除熱が効くだろうと。3号機は注入してからそんな

に時間がたっていないから、これはやはりある水を入れておかないといけないという意味での3号機と1号機の順番。いずれにしても、両方とも必要なんですけども、あえて言うと、今までの注水量から考えたときに、3号機の方が状況としては厳しいでしょうと、こういうことです。

○質問者 では、復旧の作業手順としては、まず3号機からということになるわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 結局、ここで言われているところの海水ピットがまた満たされれば、1号も3号も同じように継続が復活してということをやられていて、水源として拾えるところがないかというのはずっと当初から、海水は向こうにはいっぱいあるけれども、逆洗弁ピットは有限ですから、どこかないかみたいなことは現場の方でされていたようで、結局、消防車が届いたということで、では、吊るものあるからという方向になっていくわけですね。この辺の具体的な、消防車何台並べてというところまでの情報は来ないんですかね。

○回答者 来ていますよ。

○質問者 それも来ているんですか。

○回答者 本部で共有していますから、消防隊が今、来たんで、こうラインナップします、行けというような話はしていますから。

○質問者 物揚場から汲み取って、それを逆洗弁ピットの中に入れますというような報告も来るのは来る。

○回答者 勿論、来ます。

○質問者 報告とともに、例えば、円卓の方で、あそこがいいんじゃないか、ここがいいんじゃないかというようなことは。

○回答者 あそこがいいというのは、3号機か1号機かという意味ではなくて。

○質問者 でなくて、例えば、物揚場が。

○回答者 もともと、どこから取れるんだというのは、その前にもものすごい検討しているわけですよ。4号機側のこちらから取れないかとか、もっと言うと、4号機のタービンピルの地下に、そのときに2人亡くなっていて、遺体なんですけれども、いたんですが、ここにも水がたまっているんで、要するに、遺体救出も含めて、ここの水を使えないかとか、いろんなことをその前にやっているんですよ。実は、ここも、タービンピルの大物搬入口の入口をば一んとバックホーで壊して、消防車入れて、水が引けるかどうか、チャレンジしているんです。水は引いたんですけども、水位が低くて十分に取れないんで、引き切れないとか、いろんなことをやっているんです。

○質問者 それはもう実施しているということですね。

○回答者 しているんです。ですから、表に出てきていませんけれども、この4号機のわきに、4円盤まで行かなくても、10円盤から下に水が据える場所があるんで、そこから吸えないかということも考えているんですが、それも場所が瓦れきがあつたりして、非常に狭いのと、結局、ホースを垂らしたんですけども、そこから吸えないということも確認

したりとか、現場でそういうことをいろいろやった末で、消防ポンプが来たんで、ここが一番確実だから、ここから行きましょうと、こういうことをその前に消防チームとやって、その情報は全部共有しています。

○質問者 今、御遺体2体の話が出ましたけれども、御遺体を搬出するというんですかね、その作業というのは、どの段階。

○回答者 私は申し訳なくてしょうがなく、最初の日からダイバー入れて探すということを含めてやれということで、実際、柏崎から、そういう作業をしている人がいたということで、来てもらうことになったんですが、線量の話をしたりで実現できなくて、この作業をやっている最中にずっと私の頭にありました。早目に4号機の水を抜いて、遺体捜索に行くというのも、原子炉の維持と同時にやらないといけないとずっと思っていました。だから、さっき言った4号の水を使えればと、ある意味、両方できるかなということを含めて、チャレンジまでしたんですけれども、無理だった。

○質問者 結局、いつごろになるんですか。

○回答者 2週間、3週間たつたぐらいかな。結局、原子炉はある程度安定して、4号機の水を吐き出すという操作にかかれて、水位が下がってきてですから、どこか記録あると思うんですけれども、2週間ぐらいたつてからだったかな。4月になってからかな。ぎりぎり、そんなころだと思います。

○質問者 それは4号機の水を全部吐き出して。

○回答者 吐き出してということになるんですね。ここは私はよくは覚えていないんですが、私が登場していないではないですか。本店の高橋の話に対して。これは本店高橋なんですけれどもね。ここは多分、何か電話しているんです。だから■■■■が答えているんだと思います。

○質問者 本来だったら所長が。

○回答者 私が答えるべき話を■■■■がやっているわけですね。私はこのときまた官邸から電話を待っていたかどうかですね。このタイミングは覚えていないんですけれども、大体、そういうときは電話を、いずれにしても多分、官邸だと思うんですけれども、固定電話で状況報告したり何か、パラでやっている可能性があると思います。

○質問者 これも14日ですね。

○回答者 未明ですね。

○質問者 細野さんは、ホットラインをつくってからは、毎日のように電話があるんですか。

○回答者 結構ありましたね。どうですかと。

○質問者 本店とかだと、武藤さんなどは直接電話とかはありましたか。

○回答者 武藤さんからですか。武藤は、本店というより、オフサイトセンターにいたんで、オフサイトセンターから電話は何回かありました。

○質問者 それは、武藤さんが、テレビ会議ではなくて、電話でという感じなんですか。

○回答者 はい。

○質問者 では、次、ここまでやって午前中終わります。31番で、3月14日の明け方、夜が明けているところになるんですか。6時とか、そういうところですね。

(録画部分)

「これね、本当に要注意なんだよ。6時から6時20分の間に」

「現状、(・・・)の可能性は低いと」

「50キロになっているでしょう」

「そのとおりです」

「50キロだろう。こんなもの、もう、7時までに(・・・)超えてしまうよ」

「(・・・)につきましても、バランス出ていますので、現在、6時から6時20分、対象の地域については(・・・)」

「小森さん、水位がダウンスケールしている？」

「危機的状況ですよ、これ」

「水位がダウンスケールしている？保安院、官邸に、ドライウェル圧力が上がって」

「そう、ドライウェル圧力が急上昇して」

「水位が何。早く連絡して」

「6時10分、ダウンスケールしているんですよ。減ってきていて」

「第1グループは大丈夫です」

「減って、それから、ダウンスケールが6時10分なんで(・・・)」

「少しかぶりますね」

「保安院と官邸につながって放しにできる、電話」

「かぶる方は20分から止まるということで、予定どおり」

「保安院と官邸の方に同時に(・・・)言っておりますけれども」

「上のベント弁を開けるのを早目に開けなければいけないと思うんですが、バッテリーはつないであるんですか」

○質問者 この辺で。このころ、計画停電の関係と、いろいろかぶっているようなんですけども、6時～6時20分の間にですね。

○回答者 3号機の話でしょう。

○質問者 3号機ですね。3号機で、これはドライウェル圧力が50ぐらい上がっているところですね。14日の6時ごろですね。6時が425で、それが470になっている。大体50弱ぐらい上がっていると。それで、水位がこのころ、ずっとTAFマイナスでどんどん下がっていつている時期で、3月14日の6時20分のところは見えなくなっている。両方、AもBもですね。という状況があって、6時30分のところでは、Aが-100で、Bが-3,500みたいな極端な状況になっている。所長から、危機的状況ですよということを本店に

言っておられて、確かに所長の前のヒアリングのときも、3号機については、1つ、ドライウエルが500みたいなものがずっと続いているのが非常に嫌な状態で、その嫌な状態の根拠は、1号機のときもそういうことから水素爆発などが起きているんで、直感的にそういうふうを感じているというようなお話だったと思うんですけども、ちょうどそういうところに差しかかるところの話で、この中で、本店で話していたのは小森さんなわけですね。これは所長がおわかりではないのかもしれないですけども、保安院と官邸に同時連絡するように今、言っておりますけれども、保安院と官邸につながり放しにできる電話ということで言っておられるようですけども、本店と官邸や保安院との連絡がどうなっているのか、当時はわかりませんか。

○回答者 全くわかりません。だれがどこにいて、どういう形で本店本部がそこと連絡つけていたか、わかりません。

○質問者 電話でやっていたのか、例えば、テレビ会議システムはその時点ではないですね。

○回答者 ないです。

○質問者 あと、サイト内の状況などを直で見られるテレビ会議システムはその時点ではない。

○回答者 官邸にまで行っていなかったと思いますけれども、そこはわからないんですよ。本店の連絡網は。

○質問者 この辺はよくわかりませんね。いずれにしても、こういう危機的な状況に関しては、小森さんなどにも直接、テレビ会議を通じて、この時点でもう言っているということですね。

○回答者 計画停電の話がうるさかったですけども、ものすごくわあっと、やめると言っているのに、ぶつぶつかぶせる。

○質問者 計画停電というのは、電源の節約ということなんですか。

○回答者 電気が1F、2F、全部飛んでしまいましたから、2Fはフル運転で、1Fも3つ運転した。それから、広野も飛んでしまいましたし、要するに、電源がない状態で、次の日の電力供給に問題があったんで、計画停電やりますと。最初に2つあって、原子炉の問題がわあわあ騒がれる前に、東京電力の計画停電の話がえらい問題になったと思います。それで、このシステム、同時にそんな話をしているんですね。

○質問者 両方わあとかぶってしまっただけですね。

では、とりあえず午前中はこれぐらいで、また午後、引き続きお話を伺っていきます。とりあえず休憩いたします。1時からお願いします。

(休憩)

○質問者 そうしたら、午後も引き続きやりますので、お願いします。

午後一発目は、3月14日の夜が明けたぐらい、6時台から7時にかけてぐらいの話で、話の内容としては、3号機のところ辺りですね。ドライウェル圧力が非常に上昇してきたという辺りの話で、前に所長のヒアリングのときに、前回だったと思うんですけども、いきなり嫌な数字が続いて、現場の作業員たちを退避させたというのが、これまで時系列に載っていないということで、その辺の下りなのかなという部分がここにちょっと出てきているので、それを確認していただくということです。

(録画部分)

「吉田さん、聞こえる？吉田さん」

「はい」

「ドライウェルのドライのベントというのは設計圧の2倍ぐらいのところまで頑張ったというのがAM上の手順だと思うんだけど、そういう認識でいいですか」

「800ということですよ」

「そうそう」

「そうですけれども、それでいいと思いますけれども、ただ、上昇量が急激なものですからね」

「なるほど」

「ここがものすごく気になる。それから、燃料域のあれが、6時20分からダウンスケール、その前が急激に低下してダウンスケールしているということは、かなりドライになっているということなんですね。極端に言うと、仮想事故レベルになっている可能性があるんじゃないか」

「なるほど」

「こうなりますと、今、作業で、プラントの前、かなり人間がいますし、ここにもこれだけの人間がいるんですが、これをどうするんだと、そっちを考える方が先になるかもわかりません」

「了解。いずれにしても、2倍というぐらいのところまでドライウェル側のベントということはそうなんだけれども、いずれにしても、かなり早い時間に来ることを想定して、まず放出量というか、推定値を出してもらって」

「6時35分でドライウェル圧力520キロです」

「聞こえなかった」

「500ですか。520出たから、ドライウェルは」

「非常に要注意な状況。放出量の評価とか、そういうこと、すぐ出るか。要は、避難をやるかどうかというような、避難距離を拡大するかどうかというような話の判断に関わるので、とにかく今、急いで計算してもらえないかな」

「今、計算中、あと5分ください」

「それから、作業員の安全確保の観点から、風向きが、だから、ちょっと大熊側に、もし

外にいる人でも、3号機前はちょっと難しいか」

「武藤さん、武藤さん、この状況で何もできなくなってしまうんですけども、現場の作業員、うちの社員、一回こちらに退避させてよろしいですか」

「了解しました」

「退避命令出します。現場にいる企業の方々、現場から上がって、こちらに避難してください。これは中央操作員もいるんですが、これはどうしましょうか。これも避難した方がいいですね」

「中操の線量を見て判断してください。中操の線量。線量わかる？」

「中操の線量ね。中操の線量どうなっている？確認します」

「みんな、今、オンラインでつながっている。保安院と官邸、つながっているね。切らさないで、今の音声をほぼそのまま伝えてもらってもいいです。中操退避したらベントができないんですけども、それを含めてどうするか」

「線量率見てと言っている」

「吉田さん、その線量も含めて、線量をよく見てくださいね」

「はい」

「■■■■さん、丁寧に周りの線量を測ってください」

「はい。今の部屋の線量につきましては、マックス $28 \mu\text{Sv/h}$ 、ここです。モニタリングポストとか、その辺は、周りの線量が、上昇率が非常に広がって、その辺を丁寧に」

「一応、今の緊対の28ということであれば、そこは問題はないということだと思います」

「最新のモニタリングポストのデータで、MP2番近傍、最終6時の辺りで $400 \mu\text{Sv/h}$ でございます。正門付近、5時の値になりますが、 $6.65 \mu\text{Sv/h}$ です」

「ということは、吉田さん、周りは余り変わっていないということだよ」

○質問者 ここで一回切りますかね。今のところ、3号機のドライウエル圧力が非常に上がっているということ。この途中のところ、武藤さんと所長との間にやりとりがあって、この状況で何もできなくなってしまうんですけども、現場の作業員、うちの社員、一回こちらに退避させてよろしいですかと。了解しました、退避命令を出しましたとあって、その後で現場にいる当社社員、企業の方々、一度現場から上がって、こちらに避難してくださいとおっしゃっているんですけども、この現場にいる当社社員とか、企業の方々、一度現場から上がってこちらに避難してくださいというのは、現場に何かつながる手段があるんですか。

○回答者 一応、その時点で、トランシーバーとか、それで現場の人間とは連絡がつくようになっていますので、そこを駆使して、特に炉注をしている消防車の人間だとか、水のメーカーキャップをしている人間だとか、かなり限られていますので、そこはそういう形で連絡をしたと。

○質問者 ちょうどベントだとか、注水のところもそうでしょうけれども、そういう作業

をしている人たちは一旦引き上げるということになるんですね。しばらくは退避状況が続くんですか。

○回答者 はい。これは何時でしたか。

○質問者 ちょっと早目で、6時半ぐらいからのやりとりがずっとあって、6時30分から40分ぐらいの話ですね。要は空けているような状況で、それで一回引き上げて、ここで中操の方をどうするか、線量測るといいよという話になっておりますね。いずれにしても現場の人たちは引き上げてきて、その後、退避命令の解除みたいなものが出ることになるんですかね。それは記憶だと、爆発がこの日、11時01分に起こっていますけれども、そこまでの間で言うと、どのぐらいまでという感じですかね。

○回答者 2時間ぐらいではないですか。

○質問者 退避が。それで解除して、そこから作業をさせたら、そういう状況になったということなんですかね。退避命令はこの日1回だけなんですか。

○回答者 この日は1回だけです。

○質問者 繰り返し繰り返しではないんですね。

○回答者 ではないです。これで1回退避させて、格納容器の状況がどうなるか見ましようということで退避させました。

○質問者 一応、500台ぐらいをずっと推移して、そこからどんどん上がっていくようなことではなかったんで、ベントの作業もしなければならぬ、注水作業もしなければならぬという一方での要請もあって、その辺のバランスを考えて、どこかで決断しなければならぬということで、格納容器の圧力の水位を見て判断されて、解除して、作業再開ということだったわけですね。

この辺の退避する、しないという辺りでは、本店側なり、あるいは官邸とか、これを見ると、本店の言葉として、みんなオンラインつながっている、保安院と官邸つながっているね、切らさないで、今の音声をほぼそのまま伝わってもらってよいですけれども、中操退避したらベントはできないですけれども、それを含めてどうするかみたいなのが、これは多分、電話をそのままつなげた状態にするなりしていると思うんですね。この状況がそのまま官邸なり、保安院なりの方に入っていた可能性があるんですけれども、保安院なり官邸の方から直接現場の所長のところなりに何かコンタクトを取ってくることはありましたか。

○回答者 このときはなかったです。

○質問者 特にないですか。

○回答者 なかったと思いますね。

○質問者 そうすると、ざっくりした感じでいくと、6時30分から40分ぐらいの間に退避命令が出て、退避をさせて、大体2時間とか、それぐらいのスパンの間、様子見をして、しばらく格納容器が全然動かないんで、8時半とか9時とか、それぐらいの間にはまた現場の方に戻って再開されていて、そうしたら、11時ぐらいには爆発という状況になるんで

すかね。大体の流れとしてはですね。

○回答者 はい。

○質問者 そうしたら、その続きを。

(録画部分)

「3、4号中操当直長席で3.5ミリです。昨日よりは低い。15です。3、4号中操で、平均して、(・・・)付近で15です」

「15mSv」

「15mSvです」

「それは何時で。今ですか。今のデータですか、それは」

「3.5については現時点の値です。当直長席、3.5mSv/hにつきましては、現時点の時間です」

「6時45分ぐらい」

「これも昨日と変わらないよね」

「変わっていないですね。ちょっと注意深く線量を見て」

「ドライウエルの圧力ですけれども、6時35分、6時40分、6時45分、3ポイントとも変わらずに520キロですね」

「少しここは落ち着いているようなので、現場の作業をどうするかということも含めて、もう一回考えませんか」

「はい。ただ、格納容器のあれはともかくとして、1号のような可能性は十分ありますので、この格納容器圧力ということは、水素の発生、そういう意味で、放射能という、そういう危険作業という意味で言えば、ヤードに人を配するというのは、これは極めて難しいと思うんですけれども」

「最後はドライウエルのベントをする作業というのは、今のこの場所から行くと、どういふことになりますか」

「中操の同じパネルなので、サプレッションチェンバの応援のコネクターを外して、ドライウエル側にくっつけることで瞬時にやることができます」

「OK。今、水は入っていないんですか」

「水は入れていますよ。海水は900ℓ/m入れているんです」

「入れ続けているわけ」

「はい」

「補給の方は大丈夫ですかね」

「補給は、さっき聞いたところ、ぎりぎり3号機だけだったら、今、レベルがあると言っていたので、メーキャップがなくなりましたら、ピットに水を運べなくなっただけですね。人が今、退避になると。そこが非常に難しいんですよ」

「そこ、難しいね。勿論、人身安全第一なんだけれども、水を確保するところは工夫がで

きるかどうか考えられませんか」

「今、人海戦術やっているんで」

「炉圧を下げる方法として、MSラインのドレンラインのMO弁、L005、006、電源を仮設を引いて、それらを当てて、復水器に逃がすということは実施できないでしょうか。済みません。ドレンラインのMO弁の番号を110万のを言ってしまいました。番号を間違えました」

「110万まではいいんですけれども、MO弁の電源などは全く生きていませんし、今、ドライウェル近傍とか、原子炉建屋の中は入ることも不可能ですから、そんなのは絶対できません」

「わかりました」

「被曝評価の結果、あらあらですけれども、出ましたので、お願いします。ベント条件は、仮想事故で100%放出しています。したがって、今、(・・・)で25%ですので、それと考えるならば4分の1ぐらいの値を更新すればいいんですけれども、いずれにせよ、ヨウ素が支配的です。これは3時間後のデータですけれども、3時間後で最大ポイントは南南東の風2mで評価をいたしますと、最大ポイントは2.2km先、ちょうど敷地境界辺りで5,700mSvです。これが4分の1と考えると、1,600mSvになります。ヨウ素です。その後、この枠が1,000mSvですので、250mSv圏内がずっと相馬郡の方まで3時間以内に広がっていくという評価になります」

「250mSvが北の方ですね」

「そうです。ただし、データを連続して見ていますけれども、東風が支配的なのか、西風が支配的かによって全然状況は変わってくるんですけれども、今のところ掌握できていません。済みません」

「今の状況を刻々と、とりあえず話を続けてください。官邸と」

「今の20kmというのはどこら辺なの」

「これは5kmです。ほぼ5kmです。10km、20km、ぎりぎり20kmの範囲ぐらいです」

「20kmのところはどのぐらいの線量なの」

「20kmのところは、250mSvです」

「250mSv/h」ですか。

「いえ、アワーではなくて、積算線量が250mSvです。ただし、3時間ですので、この後、更に時間が経過すると、線量はもう少し増えてきます」

「オフサイトセンター側では、そういう判断みたいなものはあり得るんですかね。その判定会とか、普通だったら、そういう機能ができていますかね、そういうのは」

「パワー班より連絡します。今、敷地境界のモニタリングポストが地震以降、使用できませんので、モニタリングカーをモニタリングポスト4番、ちょうど発電所の西側になります。(・・・)をしていた下側、モニタリングポスト2番のところは引き上げさせて、当社のモニタリングカーを移動中です。放出が始まりましたら、モニタリングカー内での線

量を確認しながら、南側方向に移動させます。逆に待機するような形になりますが、移動させるような形で確認をしたいと思います」

「緊対室の線量状況を報告します。この部屋について、エリアモニターとγ線の値は0.014μSvで変化はありません。それから、中性子についても検出をされていません。以上です」

「コモリさん、この状況は、保安院とか、官邸とか、共有していますか」

「保安院と官邸はダイレクトで担当者が、この音声も含めてつながり続けています」

「了解」

○質問者 では、ここで一旦。ここの辺りのやりとりは、その後、退避をされていて、これも武藤さんとのやりとりですかね、ドライウェル圧力が520キロぐらい、一応、それ以上の上昇が、余り大きな変動が見られないという状況の中で、他方で作業も進めなければいけないというところから、どうするかということももう一回考えませんかというような示唆を受けて、所長の方は、これまでもおっしゃられているような、格納容器の圧力ということとともに、心配されている水素を測れというところですね。これは、格納容器が壊れる、壊れないという以前に、リークしたものが充満していくところになってくると、格納容器圧力からは計り知れない。今もでしょうけれども、どの程度の圧力になれば、どのぐらいの水素の発生が見込めるのかということは、この時点では何も測る手段がないわけですね。それで、1号のときの比較からすると、非常に怖い状況が続いているんだというところもあって、ヤードに人を配するというのは極めて難しいと思うんですというような発言になられているんですね。

○回答者 そうです。

○質問者 これに対しては、武藤さんも、それに反論みたいな感じではなかったわけですね。その後、ずっと線量の測定とか、行っているんですが、今、画面にもちょっと出ていたんですけども、このころ、ベントでは、ウェットウェルベントということが1つあると思うんですけども、ドライウェル側のところからベントするような検討みたいなのは。

○回答者 それは勿論、しています。

○質問者 それもされているんですか。実際にはそれは、3号機に関してはされていないんですね。

○回答者 ウェットウェルを先行してしまっただけですね。それをやっている間に爆発してしまって、何か、圧が下がってしまったんですね。ずっと下がってきたんで、ドライウェルベントをやるタイミングが、逆に言うと、検討はしたんだけどもという状況だったと思うんですね。

○質問者 1号機はウェットウェルだけをやっていて、2号機はウェットウェルに加えてドライウェルもということの検討も、検討の俎上には上がっていたと。

○回答者 3号機。